木和代訳『ポルノグラフィ――「平等権」と「表現の自由」の間で』明石書店。
――― & Dworkin, Ronald, 2000, 'Pornography: An Exchange' in Cornell (ed.) [2000].
Pally, Marcia, 1994, *Sex & Sensibility: Reflections on Forbidden Mirrors and the Will to Censor*, New Jersey: The Ecco Press.
Spivak, G. C., 1988, "Can the Subaltern Speak?," C.Nelson and L.Grossberg eds., *Marxism and the Interpretation of Culture*, Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 271-313. ＝一九九八年、上村忠男訳『サバルタンは語ることができるか』みすず書房。
Spivak, G. C., 1999, *A Critique of Postcolonial Reason*, Cambridge and London: Harvard University Press. (＝二〇〇三年、上村忠男・本橋哲也訳『ポストコロニアル理性批判』月曜社。
Taylor, Charles, 1994, "The Politics of Recognition," in *Multiculturalism: Examining the Politics of Recognition*, Amy Gutmann ed., Princeton, NJ: Princeton University Press. ＝一九九六年、佐々木毅・辻康夫・向山恭一訳『マルチカルチュラリズム』岩波書店。
上村忠男、一九九九年、「得策ではなかった結語？」『現代思想』Vol.27-8:190-193、青土社。
Walzer, Michael, 1983, *Spheres of Justice: A Defence of Pluralism and Equality*, New York: Basic Books Inc. ＝一九九九年、山口晃訳『正義の領分――多元性と平等の擁護』而立書房。

第5章　構築主義と言説分析

中河　伸俊

1　社会問題の構築主義の視座とプログラム

「構築主義」という学的スタンスを指すことばは、近年よく流通している。それは、自らの研究の指針や方針を示すのに使われるだけでなく、最近ではその困難や限界や不可能性についての指摘も少なくない。この語が広く使われ、さまざまな系譜のさまざまな議論や研究がこの語を使って提示されるため（たとえば、中河、二〇〇一／上野、二〇〇一／Lynch, 1998; 厚東、一九九八）、このタームはときに、コミュニケーションよりむしろディスコミュニケーションに寄与してさえいるようにみえる。そうした弊を避けるには、「ジェンダー／セクシュアリティ研究の」とか「ＳＳＫ（科学的知識の研究）の」とか「感

情の社会学の」とか「社会心理学の」とか「精神医療の」といったように、頭に領域名を冠して限定したほうがよいだろう。そうした冠によって、そこで語られる構築主義がどんな前提に立ち、どんな問いを立て、何を達成しようとしている(してきた)のかが、ある程度明らかになるからだ。本章で、言説分析への構築主義の寄与の可能性を示すにあたって筆者が念頭に置くのは、主に「社会問題の社会学の」分野での構築主義アプローチである。それは、プラグマティズムからシンボリック相互行為論やエスノメソドロジーへという合衆国オリジナルの社会学的伝統の展開を背景に、レイベリング・パースペクティヴや動機の語彙論、E・ヒューズのワーク(仕事)の研究といった先行の着想に導かれて、一九七〇年代中葉に立ち上がった研究プログラムである。

とはいえ、以上のように特定すれば、それで事足れりというわけでもない。社会問題の社会学の分野での構築主義的探究も、一九八〇年代以降、記号論やポスト構造主義、ポストモダニズムといった主に大陸系の思潮との対話を余儀なくされ、それらを受容したり、逆に一種の反動形成をしたりして、今では多様化している。この分野でのいわゆる構築主義論争(Woolgar and Pawluch, 1985 = 二〇〇〇; Holstein and Miller, 1993)とその過程での種々のクロスオーヴァーの試みは、方法論のレベルでの混乱をもたらしもした。筆者自身の、エスノメソドロジー寄りのラインでの構築主義アプローチの再定式化(中河、一九九九/中河、二〇〇五)はあくまで、そうした混乱への対応の試みの一つなのである。

社会問題の構築主義のもっとも重要なキイ概念は、クレイム申し立て(claims-making)である。スペ

クターとキッセ(Spector and Kitsuse 1977 = 一九九〇)は、ほとんどこの語の力だけで、新しい研究プログラムを立ち上げたといっても過言ではないだろう。それまでの社会問題の社会学では、社会問題は、逆機能的な、および/もしくは、共通の基準から乖離している社会の状態として概念化されてきた。しかし、構築主義アプローチは、そうした「状態」を、客観的な実在としてではなく、クレイム申し立て活動(「かくかくの状態は放置してはおけない問題である」と定義して対処を求める公共的な言説実践)と、それにさまざまに反応する人びとの活動とを通じて編み上げられる言語的な構築物(あるいは達成)として取り扱う。たとえば、ストーキングという社会問題が「ある」というのは、どんな事態を指すのだろうか。それは、構築主義的にいえば、「ストーキング」という新しい問題カテゴリーが提示され、その様態や特徴や分布や原因や解決策が定義され、それをめぐって論議が起こり、そのイメージや趨勢や代表的な事例がメディアで報道され、それが日常会話の話題になり、それに対処するための法律や取締り体勢が作られ、担当の取締り機関によってその個別の事例が同定され……といった一連の営み(Lowney and Best, 1995)に人びとが携わってきて、今なお携わっているということを意味する。

つまり、構築主義の研究プログラムは、デュルケム以来の社会問題(社会病理)研究が念頭に置いてきた不適切な社会の状態から、「問題」をめぐる人びとの活動とコミュニケーションへと、研究のトピックを移すことを提案した。これは、主流の社会学がその使命としてきた因果モデルに基づく原因論を放棄し、社会問題はなぜ生じるのかという why の問いから、人びとはどのようにして社会問題を構

成するのかという how の問いへと、基本的な問いかけを取り換えようという呼びかけ(Gubrium and Holstein, 1997; 中河、二〇〇五)でもあった。

2　言説分析と問題カテゴリー

社会問題の構築主義が立ちあがってから四半世紀の間に、同じ頃に社会運動研究の分野を席巻した資源動員論よりはずっと少ないとはいえ、それなりの数の経験的研究が積み重ねられてきた。それをディスコース研究の手法という観点からみるなら差し当たり、(1)問題カテゴリーの歴史の探究、(2)社会問題のクレイムのレトリック分析、(3)社会問題のクレイムやケースの生成の詳細をみるエスノグラフィックな研究、という三つの系統に整理することができるだろう。

このうちでは、(1)のタイプのモノグラフがもっとも多い。児童虐待、妻の殴打(DV)、アルコール依存症、喫煙、ポピュラー音楽、オゾンホール、通り魔殺人、ストーキング、登校拒否、同性愛、多重人格、更年期障害、少年法等々、問題な「状態」を構成するとされる行いや人や出来事や事柄のカテゴリー(what)がどのようにして登場し、その意味づけがどのように変遷してきたかをみるこのタイプの研究は、期間に長短はあっても、時系列的な展開を辿るという点で、一種の言説史(あるいは系譜学)のスタイルをとる。この意味づけの変遷には、既存の「ノーマルな」カテゴリーが問題化される、

逆に問題カテゴリーが非問題化される、カテゴリーが統合されたりその範囲が拡大されたりする、「悪から病気へ」の医療化(Conrad and Schneider, 1980＝二〇〇三)に典型的なように問題カテゴリーが帰属される領域が転換する、といったさまざまな展開がみられる。

邦文で読めるものに絞って、このタイプの探究の実例をいくつか挙げてみよう。喫煙問題の歴史をたどった『タバコの社会学』(Troyer and Markle, 1983＝一九九二)は、考察の枠組みが社会運動論に傾斜しすぎているという難があるとはいえ、雑誌や文献等の二次文献資料に依拠したカテゴリーの歴史研究のオーソドックスな手順を示すものだという意味で、参考になるだろう。また、文献資料よりもインタビュー調査を重用したものに、たとえば、スコットの「DSM・Ⅲにおける心的外傷後ストレス障害(PTSD)」(Scott, 1990＝二〇〇〇)がある。PTSDという新しい精神疾患のカテゴリーが、ヴェトナム反戦と帰還兵の適応というより大きな問題の文脈の中で形成されてゆく経緯を記述したこの論文は、精神医学会の診断マニュアル(DSM)に戦闘による心的外傷症状を記載させよう(つまりその症状を病気として公認させよう)とするクレイム申し立て活動が、より一般性の高いPTSD概念をもたらした背景には、カテゴリー統合による同盟形成という医学界内のポリティクスがあったことを明らかにする。カテゴリー統合は、ジェンダー／セクシュアリティの構築主義と社会問題の構築主義を架橋した田間の『母性愛という制度』(田間、二〇〇二)における知見の一つでもある。この本の前半の二つの章では、新聞記事言説の詳細な分析を通じて、一九七〇年代前半に「中絶」が「子捨て・子殺し」とカテゴリー

統合され、「母性の危機」という問題のあらわれとして大きく報道されたが、「母親を悪者にする」そのカテゴリー統合は程なく解かれ旧に復したという、ある時期のメディアでの集合表象の流れ(current)を示す知見が報告される。

いっぽう、(3)の社会問題のワーク研究(Miller and Holstein, 1997)は、六〇年代から七〇年代のエスノメソドロジー系統の司法や社会統制のエスノグラフィを受けつぐ形で構想された、新しいアプローチである。生きられた言説、あるいは言語の実際の使用にこだわるという点がクレイム申し立て概念のメリットだとすれば、社会問題の構築主義の持ち味は今後、(会話分析やカテゴリー化分析との親和性も高い)このタイプの調査研究においてもっとも生かされるかもしれない。しかし、紙幅の都合もあり、本章では社会問題の構築主義オリジナルの手法である(2)に焦点を合わせ、(3)については、この路線の研究がどんなことをしているのかを示す一例を紹介するにとどめたい。

スペンサーの「リヴァー・シティのホームレス」(Spencer, 1994)は、合衆国南東部の都市圏にある社会福祉サービス機関「ホームレス支援」でのインテイク(受け付け)のインタビューを録音し、そのトランスクリプトを分析した論文である。そこでは、その機関のソーシャルワーカーと援助を求めて来たクライエントとの一種の協同作業を通じて、どのようなやり方でクライエントの生活史が構成され、「援助を受けるに値するクライエント」が達成(構築)されるのかが明らかにされる。インタビューの中での福祉機関側の質問は、「どのようにして」、「なぜ」リヴァー・シティで宿なしになったかという、ク

ライエントの生活史の中でも最近の部分に焦点を合わせる。クライエントの最近の生活史は、「トラブル」、「なんとかしようとしている」、「孤立無援」という三つのテーマを中心にして組織化され、クライエントは、そうしたテーマとの関連でしばしば「家族」という強い切り札を使って、自らの境遇のやむをえなさを説明し、ソーシャルワーカーに了解させる。このタイプの研究によって、それが自殺であれ、少年非行であれ、DVであれ、児童虐待であれ、ホームレスであれ、社会問題のカテゴリーを適用して個別の事例を構成するという作業は、マニュアルどおりの機械的なものではなく、ローカルな言説資源やより一般的な言説資源を用いながら、現場の具体的な制約の中で参与者の実践的関心にそって織りなされる相互行為的な営みだということが明らかにされてきた。

3　構築主義のレトリック分析

社会問題のレトリック分析(先の分類でいう(2))の発想は、他の系統のディスコースの研究者にも比較的親しみやすいものだろう。「社会問題」がクレイム申し立てのような人びとの言説実践を通して現出すると考えるとき、レトリック、つまり、問題についての語りを編み上げる語彙や推論の仕組みが、分析上重要なものになる。念のためにつけ加えると、「客観的」、「科学的」、「真実」などとみなされている言明は〝じつは〟レトリカルな性質のものだという指摘は、成熟した構築主義の視点からすれば、

探究の前提であってゴールではない。人びとが特定の具体的な活動の流れの中で、どのようにレトリックやその他の言説資源を使ってその活動自体を成り立たせているのか、いいかえれば、その活動はどんな言語ゲームを伴うものなのかが、私たちの研究課題なのである。

社会問題のレトリック分析の展開には、ガスフィールド、ベスト、イバラとキツセといった論者が貢献してきた。レトリックという概念を、最初に社会問題研究に持ち込んだのはガスフィールドである。ケネス・バークやノースロップ・フライの文芸批評を援用した彼の飲酒運転問題の研究(Gusfield, 1981)は、この「問題」の実証主義的研究が〝じつは〟レトリックによって構成されていることを示し、そうした研究や飲酒運転追放運動のドラマトゥルギー(「喜劇ではなく悲劇」)を批判することに力点が置かれており、つまりは暴露という着地点があらかじめ決められた研究のようにみえなくもない。

いっぽう、社会問題のクレイムの解剖学ともいうべきベストのレトリック分析は、より平明で使い勝手がよい。ベストは、「行方不明の子ども」問題についての論文(Best, 1987＝二〇〇〇)の中で、「主張する」という言語行為に含まれる言明の構成要素を三種類に分けたトゥールミンの議論(林原、二〇〇三)を応用して、社会問題のクレイムをモデル化した。彼の整理によれば、クレイムの論理は、〈D(データ)[＋W(論拠)]→C(結論)〉というステップを踏んで構成される。ここでいうデータ(D：data)とは「事実」の提示のことであり、そこには、(1)問題の定義(何がどう問題なのか)、(2)問題の実例(こんな困った事例があった)、そして、(3)問題がどのくらいの規模のものなのかについての見積もり(たとえば統

計データ)が含まれる。結論(C：conclusion)とは、そうした「事実」を踏まえて、「だからこうしなければならない」というかたちで示される「問題」の解決策(要求や要請、提言)である。この「事実」と結論の二つが、社会問題のクレイムの骨格をなす〝理論〟だといえよう。しかしながら、「事実」と結論の間のつながりは機械的なものではないと、ベストは指摘する。両者はじつは、論拠(W：warrant)、つまり、因果関係や価値や世界観などをめぐる想定によって媒介されている。クレイムメイカーは論拠を明示的に示すだけでなく、しばしば暗黙の前提にしてクレイム申し立てを行なう。たとえば、ベスト自身の事例でいえば、「行方不明の子どもがたくさんいる」というDと、「かれらを救うために啓発や予防措置、適切な社会統制が必要だ」というCとのつながりは、「子どもはかけがえのない大切なもの」、「子どもは本人に落ち度がない純粋な被害者」、「子どもは逸脱者の好餌」、「政府の政策は不充分」といったWによって正当化された。クレイム申し立てはしばしば、その内容についての質問や疑念の表明や反論といった挑戦を受ける。ときには、そうした挑戦や、それに応えることによって戦端が開かれた論争を通じて、暗黙のWが明示化されたり、Wの内容がより詳細なものへと明確化(アーティキュレート)されていくこともある。

もちろん、ガーフィンケル(Garfinkel, 1967)の違背実験中の「記述の説明の説明……」を求めるアサイメントなどからも類推できるように、論拠への問いかけは(「子どもとは何?」、「なぜ大切なの?」、「その判断の裏づけは?」といったように)論理上は、とめどなく遡りうるものだろう。しかしそれよりも、人びと

の日常の具体的な活動の中では「論拠の論拠……」の問いかけが、あるところ(あるいはステップ)で停止するという事実のほうが、むしろ重要なのだ。たとえば、子ども関連の問題をめぐるこの国のメディアでの議論の中で、「子どもはかけがえのない大切なもの」というWが真っ向からの挑戦を受けたり、「私は子どもが嫌いだ」(伊武雅刀がナレーションをしたコミックソングのリフレイン／一九八三年)という立場からのシリアスな主張が行われることは当面考えられないだろう。

三つ目のイバラとキツセのレトリック論は、ベストのものより野心的である。構築主義的な社会問題研究のヴァージョン・アップを目指した論文「道徳的ディスコースの日常言語的な構成要素」(Ibarra and Kitsuse, 1993＝二〇〇〇)で、かれらは、言説分析に特化した社会問題研究の新しいトピックとして、(a)社会問題のレトリックのイディオム(慣用語法)、(b)対抗レトリック、(c)モチーフ、(d)クレイム申し立てのスタイル、(e)クレイム申し立ての場面の五つと、それらの間の経験的なつながりを研究することを提唱した。その後、いくつかの実用例があり、あとでみるような批判や問題点もあるものの、経験的研究に「使える」道具立てをその中から取り出すことが充分できる議論だと思われる。ここでは主に、クレイムの言説内容の分析にとくに照準を合わせた(a)と(b)に絞って話を進めたい。

(a)のレトリックのイディオムは、クレイムの要素のうち、ベストの図式でいえば論拠(W)に当たる言説領域内の、違った側面を捕捉しようとしたものだといっていいだろう。社会問題のクレイム申し立ては、説得のゲームである。クレイムメイカーは、ある社会の状態が「悪い、困った、望ましく

ない、不正な、権利侵害的な、放っておけない、危険な……」ものであり、問題解決のための「社会的な」対応が必要だと、オーディエンスを説得しようとする。そのときに、個々の「状態」に固有の論拠となる想定(たとえば「子どもの高い価値」や「被害者としての子ども」)ではなく、さまざまな「状態」に適用されてそれを社会問題として了解可能にする、汎用性の高い概念とイメージのセットがあるとイバラとキツセは考える。いいかえれば、何かが「よくない」社会問題だということを示す、道徳的説得のための日常言語的資源のキットは、状態のカテゴリーのように無数にあるわけではないと、かれらは示唆するのだ。イバラとキツセは、こうした社会問題のレトリックのイディオムにあたるものとして、「脅かされている大切なものを守ろう」という喪失のレトリック、「平等な制度的アクセスと自己実現についての選択の自由を保障しよう」という権利のレトリック、「人の安全や健康が脅かされているのだから、個別的な価値観に基づく議論をしている場合ではない」という危険のレトリック、「欺瞞や情報操作や、能力不足につけこむ不正が行なわれている」という没理性のレトリック、「多くの個別の問題の背後には巨大な危機的問題がある」という災厄のレトリックの五つを例示する。この五つは網羅的なリストではなく、構築主義の社会問題研究のそれまでの蓄積を参照しながら、一種の帰納的検討によって導かれたものである。保守やリベラル、革新といった政治的色分けを超えて、たとえば「〇〇を守れ」というように、こうした慣用語法の一端がクレイム申し立てに使われれば、細かく論理を追わなくとも、こうしたレトリックのキットが作動して、なぜその「状態」が社会問題かについての道徳的な了解が可

能になる。

社会問題のクレイム申し立ては、つねに肯定的な反応だけを呼び起こすわけではない。むしろ、さまざまな挑戦を受けて、論争へと進むことのほうが多いだろう。クレイム申し立てへの反論は、そこで問題とされる「状態」よりも別の「状態」のほうがより大きな、あるいはより本質的な問題だ(「拉致」より「植民地支配と強制連行」)とか、そのクレイム申し立て活動自体がじつは問題な「状態」だ(「青少年に有害な出版物やソフトの氾濫」をもたらしているメディアの規制強化を求める動きは「表現の自由」を脅かす)といったように、クレイムに別のクレイムをぶつけるかたちをとることもある。しかし、それとは別に、申し立てられたクレイムそのものを切り崩す挑戦の仕方もある。それが、(b)の対抗レトリックである。イバラとキツセは、こうした切り崩しの論法を、「あなたのいうことはもっともだ、しかし……」という共感的なものと、相手のクレイムを正面突破しようとする非共感的なものとに区分する。共感的な対抗レトリックとして、かれらは、「その問題についてはなすすべがない」という自然現象化、「解決は可能だがその代価や費用のほうが大きい」という解決にかかるコスト、「そういわれても自分にはどうしようもない」という無能力の表明、「一つのご意見として承っておきます」というパースペクティヴ化、「主張には同感だけどやり方が悪い」という戦術についての批判を挙げる。また、非共感的な対抗レトリックとして、「問題だとされる状態は存在しない、虚構だ」というパタン解体、「問題だとされる状態があるという主張に反する事例を、自分は知っている」という逸話語り、「クレイム申し立ての

裏には、邪悪なあるいは利己的な意図が隠されている」という非誠実の指摘、「クレイムメイカーたちは合理的な思考ができない状態にある」というヒステリアの指摘を挙げる。

田間は、イバラとキツセの喪失のレトリックを適用して、「子捨て・子殺し」をめぐる新聞記事を分析し、そこでは守られるべき対象である子どもの生命と母性愛とが分節化されないままに客体化されていること、さらには、このレトリックの使用には語り手である男性たちをクレイムの構図から外して母子という閉鎖的空間を構築させる「政治的特質」があることを指摘した(田間、二〇〇一：第六章)。また、中河(Nakagawa, 1995)は、合衆国ではあまり見当たらないが日本の社会問題活動過程ではよく見られる、〈(進んだ)外国ではこうなっているが、(遅れている)日本ではそうなっていない〉という対比によって社会問題化を促すレトリックのイディオムを同定し、それを国際化のレトリックと呼んだ。しかし、題材のユニークさという点でも、ストレートな実用によってこのアプローチの強みと弱点をよく示したという点でも、イバラとキツセのレトリック論の応用の絶好の例は、ウォレン(Warren, 1993)による一九六〇年代のラディカルライトとニューレフトのクレイム申し立て(機関紙誌や著作、ラジオ番組、演説での主張)の分析だろう。

ウォレンによれば、この時期の根本主義右翼(ジョン・バーチ協会、キリスト教徒十字軍、白人市民会議等など)と新左翼(SDS、五月二日運動、トロッキスト青年社会主義者同盟など)は、政治的立場は対蹠的だが、当時の合衆国国家のあり方を社会問題と定義し、喪失のレトリックに依拠して、理想郷としての「古

き良きアメリカ」の価値や自由やライフスタイルが脅かされていることに異議を唱えるというクレイムの形式は同じだった。イバラとキツセは、喪失のレトリックは、黄金の始原からしだいに下降していく末世思想的な歴史的時間のイメージを伴い、いっぽう、権利のレトリックは、暗黒の時代から権利や資源へのアクセスが広がり社会が向上していくという進歩的な歴史的時間のイメージを伴うという。前者では、下降の歴史の先にしばしばハルマゲドン(終末)が思い描かれるが、それは(単純化していえば)根本主義者にとっては共産主義者による国家支配の完遂であり、新左翼にとっては疎外的で暴力的な警察国家の到来である。もちろん、根本主義右翼も新左翼も、終末を回避できるだろうという希望があるからこそ、活動を継続できる。その希望は、根本主義右翼の場合には、啓蒙と説得を通じて、選挙民を共産主義者の陰謀に気づかせることにかけられていた。いっぽう、アビー・ホフマンのような新左翼は、合衆国の主流の価値や活動から離脱した人びとによる「精神の共同体」を作るという「革命的行動主義」に希望を託した。いっぽうで、新左翼は権利のレトリックをも援用したという違いもあるが、新左翼と根本主義右翼のコントラストはむしろ、イバラとキツセがいうところのクレイム申し立てのスタイルにおいて際立っていたと、ウォレンは述べる。根本主義右翼が科学的もしくは学問的な文体や形式でクレイム申し立てをしようと努めたのに対して、大学から生まれた新左翼は、「マザーファッカー」や「ピッグ」といった反アカデミズム的な語彙を愛用し、また、(構築主義者と同じように!)引用符や「〜といわれる」といった修飾語を多用した「否定的な(ironicizing)」文体を使った。

以上の紹介から分かるように、社会問題のレトリック分析は、従来の社会学でイデオロギーと呼ばれきわめて大づかみに扱われていたものの組成を、具体的言説に即してより細かく解明しようとする試みでもある。私たちの立場からすれば、イデオロギーは、もちろんいわゆる虚偽意識としてではなく、動機の語彙やアカウントの延長線上にあるものとして思い描かれる。それをとりあえず、日常の言説実践の中で「その先」の根拠づけを求められない推論とイメージのセットというふうにいっておいてもいいかもしれない。スペンサーの事例での「家族」、ベストの事例での「価値ある子ども」、ウォレンの事例での「アルカディア＝古きよきアメリカ」などが、それに当たる。ただし、それはいつでも絶対に疑われない(疑うことができない)何かでもなければ、人がその上に「世界観」を築き上げる一貫性を持った土台のようなものでもない。それは、人びとが日々の営みの中で、その実践的な関心に応じてさまざまに使う日常言語的資源の一部なのである(Gubrium and Holstein, 1990＝一九九七)。

4　構築主義的な言説分析の困難?

こうしたレトリック分析の一つの欠点は、平板でダイナミズムに欠けるということである。ウォレンの事例研究も、二つの陣営が使ったレトリックの列挙に大きなスペースが割かれ、スペクターとキツセのプログラムあったダイナミックな相互行為への目配りは後退している。そもそも、イバラとキ

ツセのレトリック論を文字通りに受け取るなら、そこで要請されているのは、一種の「レトリックの辞書作り」の作業だといっていいだろう。

馬場(馬場、二〇〇二)が指摘するとおり、言語行為論がいうコンスタティヴ(事実確認的)とパフォーマティヴ(行為遂行的)というコミュニケーションの二次元の、前者から後者へという矢印が、構築主義のベクトルだった。しかし、この二次元のどちらかへコミュニケーションを差し戻す(還元する)発想は、コインの裏表のように同型の理論的構図を持つことになると、馬場はいう。「言語行為論は解釈が文法によってあらかじめ決定されているのではなく、遂行的次元における不確定なプロセスのなかで、作品と読者との『相互行為』を通じてそのつど決定されるということを強調する。ところがこの理論は、問題の相互行為を『慣習的なもの』と読んで記述する段になると、それが一定のコード(慣習的なもののコード)に従って生起するものとして捉えてしまうのである。これでは単に『コード』をある位置から別の位置へとずらしたにすぎないではないか。」(同書:四九)そして馬場は、イバラとキツセのレトリック論も、言語行為論と同じように、コミュニケーションのパフォーマティヴ次元への「差し戻し」と、そしてその志を結果として裏切ることになる、パフォーマティヴ次元の探究のコード捜し(慣習的ではあるが確定したパタンのセットがあると想定しそれを見つけ出して示そうとすること)への還元の試みだったと指摘する。

同じ弱点を別の角度から突いたものに、エスノメソドロジーの立場からの批判(Bogen and Lynch, 1993;

西阪、一九九六/岡田、二〇〇二)がある。イバラとキツセが提示した各種のレトリックや、「クレイム申し立て」というキイ概念、あるいは「社会問題」という対象の切り取り方そのものさえもが(Warren, 1993: pp. 81-82)、そうしたタームを使って言及される人びとの活動とは無縁の、研究者の営みの側に属するカテゴリー化ではないのか。「イバラとキツセが探究しているはずの多様な[社会問題の]言語ゲームは、クレイム申し立ての組織化を通じた、一般的な『社会問題のプロセス』という旗印のもとに、容易に納まるようなものではない。たしかに、論争の多くは、イバラとキツセが推奨する方法によって分析可能である。だが、社会問題の言語ゲームのすべてが、異なる立場からの申し立ての応酬という形式を取る必要はない。ボーゲンとリンチは、イバラとキツセのしていることは、チェスにおけるある手が、ゲーム一般[正確には盤ゲーム一般]における指し手であるというようなものだと言う。この指摘は、さまざまに解釈可能なある指し手を研究者が『社会問題』として構成してしまうことへの批判とも読める。だが、[……]ここでの、ボーゲンとリンチの批判の論点は、イバラとキツセが分析の対象を構成してしまっているということではなく、かれらが『社会問題』を一般理論によって研究可能にするために、もともとの現象の豊かさを切りつづめてしまっていることにあるのである。」(岡田、二〇〇一:三二)さらに、岡田は、馬場のコンスタティヴ/パフォーマティヴの二次元の一方への「差し戻し」批判に呼応するかのように、従来エスノメソドロジーの「中心的な教義」として流布していた(だからもちろんキツセたちも参照している)「トピックとリソースの区分」についての議論は、いわゆる「超越論的還

元」が可能だ(そして、エスノメソドロジーはそうした分析の手順を推奨している)と誤解させるという意味でミスリーディングなものであり、「トピックとリソースを分離することはできない」と論じる(同書:二九〜三〇)。

見てのとおり、こうした批判の射程はレトリック分析だけでなく、社会問題の構築主義の研究プログラム全体に及ぶものである。これらに対応するには、社会問題の構築主義の出発点に戻って、いくつかの点を再確認する必要がある。スペクターとキツセのクレイム申し立てアプローチの言説分析としての最大の特徴は、状況の中に置かれた(situated)公共的な言説実践を研究対象として名指したことだった。イバラとキツセのレトリック論は、ウールガーらの方法論上の批判(いわゆるオントロジカル・ゲリマンダリングの指摘; Woolgar and Pawluch, 1985 = 二〇〇〇)を逃れるためとはいえ、その原点を離れて、「言説だけ」を取り扱う研究プログラムを目指しているようにみえる。しかし、状況の中に置かれ、状況の中でのみ成り立つ言説実践(クレイム申し立て)を取り扱うという原点に立ち戻れば、まるで宙に浮かんでいるかのような「純粋な言説」などというものがありえないことは自明なはずだ。いいかえれば、構築主義的な社会問題研究は、個別の経験的事例を離れては成り立たない。先に、社会問題のワークの研究が、もっとも構築主義の持ち味を生かしたものになりうると書いた理由もそこにある。

筆者は、「社会問題」や「クレイム申し立て」は、メンバーのことば(日常言語)であると同時に(日本語のクレイムはまだ浮いているが、英語の claim はまったくの日用語だ)、研究者にとっては、ブルーマーがいう

感受概念(sensitizing concept: Blumer, 1969)の役割を果たすものだと考える。感受概念とは、筆者の理解では、人びとの活動の探究のために、とりあえずの出発点もしくは入口として設定される概念といったものだ。入口は、あくまでそこから入るためにあるのであって、首尾よく入ってしまえば、その先は経験的対象に即した解析を進めていけばよい。

社会問題のレトリックについていえば、イバラとキツセが述べる語彙や推論、イメージの連鎖はあくまで典型化された記述であり、それが絵に描いたような形で実際に立ち現れることがあるかどうかは疑わしい。しかし、それは、「放ってはおけない、困った、よくない、不正な、etc」である事柄、もしくは集合的なトラブルをめぐる人びとの日常的な語りのある部分を、かなりうまく捕捉していると考えられる。この判断が正しいなら、問題は、それが個別の使用の事例とそのコンテクストとを離れた辞書的なリストとして提示されている点にある。辞書の定義や用例を実際の使用と混同してはいけないが、しかし、辞書的なリスト化の試みは、それが上手くできていれば、事例研究の役に立つ(こともある)。それは、辞書を参照するだけで会話や文章が理解できるというのはもちろん誤りだが、しかし、実際問題として、辞書はしばしば会話や文章の理解に役立つ、というのと同じことである。さらに、イバラとキツセは、閉じた、あるいは不変の辞書を思い描いているわけではなく、フィードバック可能な開いたリストを、一種の呼び水として提示したのだということも勘案する必要がある。こうしたレトリック分析を、サックス以来の成員性カテゴリー化分析とつないでいく試みなども、イバラと

キッセの限界を突破する一つの方途になるかもしれない。

馬場のコンスタティヴ／パフォーマティヴの区分（これはラディカル構成主義の用語では情報／伝達の区分に当たるらしい）の一方への「差し戻し」批判についていえば、これも、人びとの活動を調べるという社会問題の構築主義の原点（そのルーツはおそらくE・ヒューズの仕事の研究）へ立ち戻ることによって、そうしたやり方を回避することができると考える。「何」が（＝コンスタティヴ）「誰によってどのように」（＝パフォーマティヴ）伝達されたかは、どちらも構築主義的な「社会問題」研究の関心事である。もちろん、エスノメソドロジーの知見を経由した私たちは、クレイムとクレイム申し立て主体とクレイム申し立ての場面とが、コミュニケーション（相互行為）を通して同時的、相互反映的に構成される、という認識に達している。しかし、一見それとは矛盾するようにみえる上記の二つの次元を区分（分節化）しながら出来事を観察することこそがコミュニケーションの「理解」なのだという、ラディカル構成主義の基本的視点（馬場、二〇〇一：四六）もまた、なおざりにはできない。おそらく、why（因果論的な「なぜ」）を捨て、what（「なに」）と how（「どのように」）の二つの問いを往還する研究プログラムを整序することが、ここまでに見てきた批判への前向きの応答になるだろう（詳しくは、中河、二〇〇五、を参照のこと）。そして、方法論的にナイーブな点があるとはいえ、スペクターとキッセの提言を、そうした方向への展開の出発点として「再想像」することはできるはずだ。

残った紙幅で、構築主義の方法論をめぐる「躓きの石」について、二、三のコメントをしておきたい。

最初の論点は、実在論（realism）、ひらたくいえば「ある」ということをめぐるこの間の議論についてである。構築主義は反実在論の立場をとるという認識が流通している。そしてそれが、ウールガーとポーラッチのOG（オントロジカル・ゲリマンダリング）批判のような、もつれた議論の背景になっている。ウールガーらは、構築主義のスタンスをとる社会問題の研究者は、クレイムメイカーが問題だとする社会の状態が「ある」かどうかについては括弧に入れながら、クレイム申し立ての背景要因を初めとする、構築主義的な説明を可能にするような状態については、それを括弧入れの対象にせず、暗黙のうちに「ある」と想定するというズルをしているという。そこから、かれらはさらに、社会学的説明はそうしたズル（存在論上の境界の恣意的設定）なしに可能かという、より一般的な問いへと、論点をスライドさせる。ウールガーは、科学社会学の分野で、反実在論の立場からの社会学的探究の可能性を模索してきており、OG批判は、そうした視点に立って社会問題の構築主義の「不徹底」を突くものだったといえる。

しかし、スペクターとキッセの当初の提案は、哲学的立場としての反実在論を前提にしてはいなかった。かれらは、社会の状態ではなく、人びとの活動を調べようと提言した。その提案がポジティヴィストの実在論の回避を含意しているからといって、自動的に、実在論の裏返しの反実在論（唯名論？）を推奨したということにはならない。筆者はすでに、OG1とOG2という区分を使って、「状態」についてのOGは回避可能だが、全面的なOGの回避は不可能であり（岡田流のいい方をするならトピック

とリソースは最終的には切り離せない)、後者を焦点にした問題構成は、擬似問題もしくは「ないものねだり」にすぎないと主張した(中河、一九九九：七章。なお、本章を執筆したあとに、中河、二〇〇四で、OG問題についてより体系的に論ずる機会を得た)。

社会学は経験科学だという位置づけを否定しないなら、社会学の調査研究は、何かが「ある」ことを前提にした報告の形式をとらざるをえない。社会問題の構築主義プログラムは、「客観的」(つまりは全体化された)社会の状態が「ある」から、局域的な人びとの活動が「ある」へと、何が「ある」のかについての想定を変更する試みだった。これに対して、「[……]社会の安易な実体視をあれほど強く批判する構築主義だが、やっていることは要するに、『社会は客観的に取り出すことはできない、だが社会に対する言説は客観的に取り出すことができる』という『客観性』の一段ずらしであるということだ」(遠藤、本書1章：三七頁)といった批判が寄せられている。人びとの言説実践を伴う活動が観察／報告可能だと考えることと、「社会に対する言説[を]客観的に取り出す」ことができると考えることは、必ずしも同じではない。しかし、それはさておき、ここで再確認したいのは、ある種のコミュニケーションのジャンル(あるいは言語ゲーム)においては、「ある」という想定(サールのタームを借りるなら外部実在論)は、単なる恣意的な想定ではなく、コミュニケーションが了解可能な(「わかる」)ものになるための背景的な条件だということである(Searle, 1995; 北田、一九九八)。昔話や小噺やロール・プレイングなど、「ある」を前提としない(あるいはゴフマンの枠組分析的にいえばフレームを重ねることによって変換された「ある」を

前提にした)コミュニケーションもあるが、日常の、そして学問的なさまざまの種類の営みの中で、私たちはストレートな「ある」を言外の前提にしてコミュニケーションを行なう。もちろん、社会学はそうしたタイプのスピーチ・ジャンルの一つ(つまりは経験科学)であるという位置づけを否定した上で、「社会の全体性や、全域を見渡す超越的視線を、それと気づくことなく執拗に想定させる何かとの闘争」(遠藤、本書1章：五五頁)を繰り広げていくというのなら(そうした物言いにすでに背理の匂いを感じつつ)、ボン・ヴォヤージュというしかない。

ただし、こうした「客観性」の一段ずらし(正確には「ある」の一段ずらし)の手順に対してしばしば寄せられる、ずらす前も後も五十歩百歩という批判には承服しがたい。社会の状態が「ある」というが、その「ある」はどのようにして観察／報告可能なのかという反問が、『社会問題の構築』の出発点だった。「システム」や「社会解体」や「アノミー」や「家父長制」や「ポストモダンの社会状況」を、私たちは、どのようにして観察できるのか。社会学の理論による全体化作業の介在なくしては、そうした「状態」についての報告は不可能だろう。いっぽう「一段ずらし」と揶揄される指針の変更を承認した私たちは、日常言語のコンピータンスに依拠して、そこに「ある」人びとの活動を観察し、それについて報告できる(Gubrium and Holstein, 1990＝一九九七：一章)。いいかえれば、メンバーにとっての「ある」にリンクさせ(つつ区分す)る形で研究者のゲームを設定することによって、直接・間接に観察可能な「ある」を確保するというのが、私たちの選択だった。たとえば「クレイム申し立て」という言語行為を、メンバーが、し

たがって私たちが同定できるというのは、そういうことだ。ただし、同定可能といっても、それはもちろん、いかなる意味でも全体化・普遍化が保障されるような「ある」ではなく、研究者のゲームという特定の「コミュニケーションの内部でのみ存在するコードによって観察」が行なわれた結果(馬場、二〇〇一：五一)としての、ローカルな「ある」にすぎない。つまり、私たちにとって記述可能な「存在」はどこまでいっても、つねにコミュニケーション内在的、かつ偶発的(その都度的)なものであるしかない。

ミラーは、「ある」についての方法論的議論(OG論争)は、学問研究というゲームの領域内のアカデミックな構築主義の関心事にすぎないと指摘し、それにブリーフ・セラピー(短期療法)を典型例とする応用的な構築主義を対置して、後者が持つ可能性についてもっと考えてみようと呼びかける(ミラー、二〇〇三)。その立脚点について鵜的な印象を拭いがたいある種の臨床社会学の提言に比べて、クライエントと活動の文脈とを特定し、その中でどれだけ「役に立つ」かを問うミラー流の応用構築主義は、少なくとも話がすっきりしている。筆者は、構築主義の方法論についての論戦は、実在論／反実在論といった水掛け論の温床以上のものになりにくい論点ではなく、「何をしたいのか」を軸にして展開するほうが生産的だと考える。批判を着地点にしたい構築主義者は少なくないように見えるし(たとえば、Margolin, 1997 =二〇〇三)、ミラーがいうような応用の試みもある。こうした批判的構築主義や応用構築主義に対して、「学的探究のための学的探究」を標榜するアカデミックな構築主義(詳述する紙幅はな

いがこれを「科学主義」と呼ぶのはミスレイベリングである)を堅持しようと、故キツセや筆者は呼びかけ、あえてヒール(悪役)を買って出つづけてきた。この立場からすれば、応用構築主義と批判的構築主義のプログラムは、いずれも厄介な課題を抱えこんでいるようにみえるが(中河、二〇〇三)、しかし、そうしたゲームが求められるコンテクストや、それにコミットしたいという志の由来は理解できる。応用と批判についての方法論的吟味は、社会問題の構築主義の今後の課題だといわなければならないが、どのヴァージョンの構築主義を志すにせよ、人びとの活動の経験的な詳細(particulars)に肉迫することは、「よい」構築主義的探究の一つの条件でありつづけるだろう。そうした作業のために流すべき汗が、かなりの程度、方法論レベルでの論争の大仰な身振りに置き変えられてしまっていることこそが、構築主義的探究が現在直面している最大の困難であるかもしれない。

文　献

馬場靖雄、二〇〇一年、「構成と現実／構成という現実」中河伸俊・北澤毅・土井隆義編『社会構築主義のスペクトラム』ナカニシヤ出版。

Best, J., 1987, "Rhetoric in Claims-Making: Constructing the Missing Children Problem", *Social Problems* 34. =二〇〇〇年、足立重和訳「クレイム申し立てのなかのレトリック―行方不明になった子どもという問題の構築」

平英美・中河伸俊編『構築主義の社会学』世界思想社。

Blumer, H., 1969, *Symbolic Interactionism: Perspective and Method* , University of California Press.

Bogen, D. and Lynch, M., 1993, "Do We Need a General Theory of Social Problems?", in : J. A. Holstein and G. Miller (eds.), *Reconsidering Social Constructionism: Debates in Social Problems Theory*, Aldine de Gruyter.

Conrad, P. and Schneider, J. W., 1980, *Deviance and Medicalization: From Badness to Sickness* , C.V.Mosby (Expanded Edition, 1992, Temple University Press). ＝二〇〇三年、進藤雄三監訳『逸脱と医療化――悪から病へ』ミネルヴァ書房。

Garfinkel, H., 1967, *Studies in Ethnomethodology* : Prentice-Hall.

Gubrium, J. F. and Holstein, J. A., 1990, What Is FAMILY?: Mayfield. ＝一九九七年、中河伸俊・鮎川潤・湯川純幸訳『家族とは何か』新曜社。

Gubrium, J. F., and Holstein, J. A., 1997, The New Language of Qualitative Method : Oxford University Press.

Gusfield, J. R., 1981, *The Culture of Public Problems: Drinking-Driving and the Symbolic Order* , University of Chicago Press.

林原玲洋、二〇〇三年、「S. Toulmin の議論モデル・再考――相互行為としての論争／規範としての論理」『現代社会理論研究』一三号、人間の科学社。

Holstein, J. A. and Miller, G. (eds.) , 1993, *Reconsidering Social Constructionism: Debates in Social Problems Theory* , Aldine de Gruyter.

Ibarra, P. R. and Kitsuse, J. I., 1993, "Vernacular Constituents of Moral Discourse: An Interactionist Proposal for the Study of Social Problems", in : J. A. Holstein and G. Miller (eds.) , *Reconsidering Social Constructionism* , Aldine de Gruyter. ＝二〇〇〇年、中河伸俊訳「道徳的ディスコースの日常言語的な構成要素――相互作用論の立場からの社会問題研究のための一提案」平英美・中河伸俊編『構築主義の社会学』世界思想社。

伊武雅刀(歌)、一九八三年、「子供達を責めないで」(秋元康作詞)、CBSソニー。

北田暁大、一九九八年、「構築主義と実在論の不可思議な結婚――J・サール『社会的現実の構成』をめぐって」『Sociology Today』九号。

厚東洋輔、一九九八年、「総論社会学の理論と方法1 日本の社会学の戦後五〇年」高坂健次・厚東洋輔編『講座社会学1 理論と方法』東京大学出版会。

Lowney, K. S. and Best, J., 1995, "Stalking Strangers and Lovers: Changing Media Typifications of a New Crime Problem", in : J. Best (ed.) , *Images of Issues: Typifying Contemporary Social Problems* (Second Edition) , edited by J.Best. Aldine de Gruyter.

Lynch, M., 1998, "Toward a Constructivist Genealogy of Social Constructivism", in : I. Velody and R. Williams (eds.) , *The Politics of Constuctionism* : Sage.

Margolin, L., 1997, *Under the Cover of Kindness: The Invention of Social Work* , The University Press of Virginia. ＝二〇〇三年、中河伸俊・上野加代子・足立佳美訳『ソーシャルワークの社会的構築――優しさの名のもとに』明石書店。

Miller, G. and Holstein,J. A. (eds.) , 1997, *Social Problems in Everyday Life: Studies of Social Problems Work* , JAI Press.

G・ミラー、二〇〇三年、岡田光弘訳「理論から応用へ?――構築主義を採用する社会問題の社会学」『文化と社会』四号、マルジュ社。

Nakagawa, N., 1995, "Social Constructionism in Japan: Toward an Indigenous Empirical Inquiry", in : J. A .Holstein and G. Miller(eds.), *Perspectives on Social Problems*, vol.7 : JAI Press.

中河伸俊、一九九九年、『社会問題の社会学――構築主義アプローチの新展開』世界思想社。

――――、二〇〇一年、「Is Constructionism Here to Stay?」中河伸俊・北澤毅・土井隆義編『社会構築主義のスペクトラム』ナカニシヤ出版。

――――、二〇〇三年、「ラウンド・テーブルのためのイニシャル・ノーツ」(関西社会学会第五二回大会のラウンドテーブル・セッション「応用構築主義と批判的構築主義――構築主義の有用性?」の基調ノートとして執筆され http://homepage2.nifty.com/tipitina/roundtable2004.htm にネット公開された)。

――――、二〇〇五年、「『どのように』と『なに』の往還――エンピリカルな構築主義への招待」盛山和夫他編著『〈社会〉への知――現代社会学の理論と方法(下)』勁草書房。

――――、二〇〇四年、「構築主義とエンピリカル・リサーチャビリティ」『社会学評論』五五巻三号。

西阪仰、一九九六年、「差別の語法――『問題』の相互行為的達成」栗原彬編『講座差別の社会学1・差別の社会理論』弘文堂。

岡田光弘、二〇〇一年、「構築主義とエスノメソドロジー研究のロジック」中河伸俊、北澤毅、土井隆義編『社会構築主義のスペクトラム』ナカニシヤ出版。

Scott, W. J., 1990, "PTSD in DSM-III: A Case in the Politics of Diagnosis and Disease", *Social Problems* 37. =二〇〇〇年、馬込武志訳「DSM-III における心的後ストレス障害――診断と疾病の政治学における事例」平英美・中河伸俊編『構築主義の社会学』世界思想社。

Searle, J., 1995, *The Construction of Social Reality*,: The Free Press.

Spector, M., and Kitsuse, J. I., 1977, *Constructing Social Problems* , Cummings (3rd Edition : Transaction, 2000). =一九九〇年、村上直之・中河伸俊・鮎川潤・森俊太訳『社会問題の構築――ラベリング理論をこえて』マルジュ社。

Spencer, J. W., 1994. "Homeless in River City: Client Work in Human Service Encounters", in : G. Miller and J. A. Holstein(eds.), *Perspectives on Social Problems*, Vol.6, JAI Press.

田間泰子、二〇〇一年、『母性愛という制度――子殺しと中絶のポリティクス』勁草書房。

Troyer, R. J. and Markle, G. E., 1983, *Cigarettes: The Battle over Smoking*, Rutgers University Press. =一九九二年、中河伸俊・鮎川潤訳『タバコの社会学』世界思想社。

上野千鶴子編著、二〇〇一年、『構築主義とは何か』勁草書房。

Warren, C. A. B., 1993, "The 1960s State as a Social Problem: An Analysis of Radical Right and New Left Claims-Making Rhetorics", in J. A. Holstein and G. Miller(eds.), *Reconsidering Social Constructionism* , Aldine de Gruyter.

Woolgar S. and Pawluch, D., 1985, "Ontological Gerrymandering: The Anatomy of Social Problem Explanations." *Social Problems* 32. =二〇〇〇年、平英美訳「オントロジカル・ゲリマンダリング――社会問題をめぐる説明の解剖学」平英美・中河伸俊編『構築主義の社会学』世界思想社。

編者紹介

佐藤　俊樹(さとう　としき)
1963年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科助教授
東京大学大学院社会学研究科博士課程中退。博士(社会学)。

【主要著作・論文】
『近代・組織・資本主義』ミネルヴァ書房、1993年。
『ノイマンの夢・近代の欲望』講談社、1995年。
『不平等社会日本』中央公論新社、2000年。
『桜が創った「日本」』岩波書店、2005年。

友枝　敏雄(ともえだ　としお)
1951年生まれ。九州大学大学院人間環境学研究院・文学部教授
東京大学大学院社会学研究科博士課程中退。

【主要著作・論文】
『モダンの終焉と秩序形成』有斐閣、1998年。
『ランドル・コリンズが語る社会学の歴史』(訳者代表)有斐閣、1997年。

Discourse Analysis in Contemporary Sociology

シリーズ 社会学のアクチュアリティ：批判と創造5
言説分析の可能性——社会学的方法の迷宮から

2006年3月31日　初版第1刷発行　〔検印省略〕

＊定価はカバーに表示してあります

編者©佐藤俊樹・友枝敏雄　発行者 下田勝司　印刷・製本 中央精版印刷

東京都文京区向丘1-20-6 郵便振替 00110-6-37828　発行所
〒113-0023 TEL(03)3818-5521(代) FAX(03)3818-5514 株式会社 東信堂
E-Mail tk203444@fsinet.or.jp

Published by TOSHINDO PUBLISHING CO., LTD.
1-20-6, Mukougaoka, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0023, Japan

http://www.toshindo-pub.com/

ISBN4-88713-654-4 C3336 2006 ©T. Sato, T. Tomoeda

執筆者紹介

※編者は奥付参照。

遠藤　知巳（えんどう　ともみ）日本女子大学教授
1965年生まれ東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学
【主要著作・論文】『イメージの中の社会』（共著）（東京大学出版会、1998年）、『ミハイル・バフチンの時空』（共著）（せりか書房、1997年）、「言語・複数性・境界」『思想』940など。

北田　暁大（きただ　あきひろ）東京大学大学院情報学環助教授。
1971年生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程退学。博士（社会情報学）
【主要著作・論文】『責任と正義』（勁草書房、2003年）、『広告の誕生』（岩波書店、2000年）。

坂本佳鶴恵（さかもと　かづえ）お茶の水女子大学教授
1960年生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程中退
【主要著作・論文】『アイデンティティの権力——差別を語る主体は成立するか』（新曜社、2005年）、『〈家族〉イメージの誕生—日本映画における〈ホームドラマ〉の形成』（新曜社、1997年）、『社会学のエッセンス』（友枝敏雄、竹沢尚一郎、正村俊之、坂本佳鶴恵著）（有斐閣、1996年）など。

橋本　摂子（はしもと　せつこ）東京工業大学大学院社会理工学研究科助手
1974年生まれ。東京工業大学大学院社会理工学研究科博士課程退学
【主要著作・論文】「〈社会的地位〉のポリティクス——階層研究における"gender inequality"の射程」『社会学評論』54-1（2003年）、「道徳認識から政治的判断へ——アーレント政治理論における「真理」をめぐって」『現代社会理論研究』15（2005年）。

中河　伸俊（なかがわ　のぶとし）大阪府立大学人間社会学部教授
1951年生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。博士（文学）
【主要著作・論文】『社会問題の社会学』（世界思想社、1999年）、『社会構築主義のスペクトラム』（共編著）（ナカニシヤ出版、2001年）。

言説と実証という主題は社会学にとって根源的なものであり、研究のすそ野もこの数年でさらに広がったおかげで、公刊物としての意義は以前より増したと考えている。また刊行に際して、あらためて必要最小限の加筆修正をお願いし、可能な場合には最新の研究状況もフォローしていただいたが、それらもふくめて、著者の方々にはさまざまな面でご迷惑をおかけした。

この場をお借りしてお詫びしたい。)

目次／言説分析の可能性——社会学的方法の迷宮から

はしがき……i

序章　閾のありか——言説分析と「実証性」——……佐藤　俊樹　3

1　氾濫する「言説」……3
2　フォーマライゼーションと言説分析……4
3　意味が確定できる単位……7
4　「実証性」とは何か……10
5　テクストとデータの並行性……14
6　方法としての言説分析……17
7　言葉を語ることへ……19

第1章　言説分析とその困難（改訂版）——全体性／全域性の現在的位相をめぐって——……遠藤　知巳　27
1　挟み撃ち……27
2　言説社会のリアリティ……30
3　素朴唯名論の地平……33
4　社会学と言説分析……40
5　フーコーの文体……44
6　困難さのただなかで……48

第2章　フーコーとマクルーハンの夢を遮断する——フリードリッヒ・キットラーの言説分析——……北田　暁大　59
1　フーコー（マクルーハン）批判をめぐって……60
2　キットラーの賭け——書き込みのシステムを書く……71
3　賭博師キットラー……83

第3章　メディアが編む国家・世界そして男性——サッカーゲームの言説分析——……坂本佳鶴恵　89
1　メディア・イベントとしてのワールドカップ……89
2　テレビ中継……92
3　試合中継の分析……95
4　「日本」報道の意味……98
5　世界という言説……106
6　女性向け言説……111
7　おわりに……114

第4章　空白の正義——「他者」をめぐる政治と倫理の不／可能性について——……橋本　摂子　123
1　理想郷の陰……123
2　「正しさ」の行方……126
3　跳躍としての解釈……131

4 表象の暴力、あるいは表象という暴力……138
5 おわりに……144

第5章 構築主義と言説分析……中河 伸俊 153
1 社会問題の構築主義の視座とプログラム……153
2 言説分析と問題カテゴリー……156
3 構築主義のレトリック分析……159
4 構築主義的な言説分析の困難？……167

第6章 知識社会学と言説分析……橋爪大三郎 183
1 はじめに……183
2 知識社会学……184
3 言説分析……191
4 言説分析以降……198

第7章 言説分析と実証主義……鈴木 譲 205
1 はじめに……205
2 「言説分析の実証主義的考察」と「実証主義の言説分析的考察」……209
3 実証主義と理念主義……214
4 言説分析の位置づけ……219
5 「言説分析」と「言説の質的分析」……226

終章 言説分析と社会学……友枝 敏雄 233
1 言説分析の新しさ……233
2 言説分析の定義……235
3 社会学における理論構成……238
4 言説分析の独自性・特異性——社会学理論からの隔たり……244
5 ハードな言説分析か、ソフトな言説分析か……249

事項索引……255
人名索引……256
執筆者紹介……258

言説分析の可能性——社会学的方法の迷宮から